

離島へき地小規模校における観察実習の意義

－奄美大島における学校環境観察実習とその教育効果－

屋 宮 栄 作 [鹿児島大学教育学部 (教育実践総合センター)]

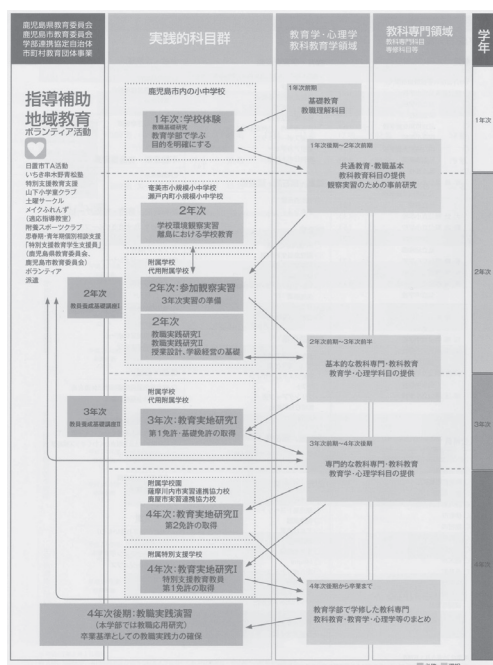
Significance of teaching practice at a small scale schools on isolated islands and districts

OKUMIYA Eisaku

キーワード：学校環境観察実習、へき地教育、離島小規模校、学校体験、複式授業

1. はじめに

本学部では教科教育学領域や教科専門領域の理論的な学修と実践的科目群を往還させながら、教員として必要な資質能力を身に付けていくカリキュラム体系が組織されている。(図1)



(図1) 鹿児島大学教育学部案内 2014

学校環境観察実習は、2年次学生を対象に実施される選択の総合講義(1単位)であり、前期に集中講義の形で行われている。学部生40人程度を募集し、奄美大島の小規模校での学校体験・観察実習を行い、鹿児島県で教職を目指し学ぶ者として、離島での学校教育や社会教育についての体験を通して、教職員の仕事を間近で知り子ども

ちと触れ合い地域に根ざした教育の在り方について学ぶことを目的としている。

この実習の出発点は、平成9年、当時の文部省が全国の教員養成系大学に募ったフレンドシップ事業にさかのぼる。多くの大学では学生たちのボランティア教育実践活動を目的としたのに対し、本学部では奄美大島での学校・地域体験を行うことを目的に始まった。本県教育環境の実情、教育界における本学部の立ち位置、そして本学部入学生の実態がその基盤にあったという。本事業は学部カリキュラム改革の流れを受け、平成19年度から離島の小規模校における学校体験に焦点化され、平成21年度からは対象学年を1年次から2年次に変更して現在に至っている。

昨年度(平成26年)、学校環境観察実習の担当者(3人)のひとりとして学生たちに同行し、彼らの成長過程を直に感得する機会に恵まれた。観察実習は往復の船旅を含め約1週間の短い期間であるが、学生たちが離島やへき地小規模校の特性を感じ取り、へき地校勤務に対する実践意識の形成を図る上で大きな意義をもつと確信した。本稿では、学生の意識の変容から、地域に根ざした教員養成に資する本観察実習の教育効果を明らかにしたい。

2. 鹿児島県のへき地学校の現状

へき地教育振興法では、へき地教育とは交通条件及び自然的、経済的、文化的諸条件に恵まれない山間地、離島その他の地域に所在する公立の小学校及び中学校の児童・生徒に行われる教育をいう。小規模校は通常文科省の基準で2学級以下の小規模の学校を指しており、へき地校と小規模校

はそれぞれ別の概念としてとらえられる。しかし、現状ではへき地校に指定された学校は小規模校化しており、本稿ではへき地小規模校と一括して述べていく。

鹿児島県におけるへき地小規模校の現状（平成27年4月）は次のとおりである。（表1, 2）

表1 へき地校の割合等の状況

へき地校の割合	・ 小学校数の 39.7% ・ 中学校数の 39.3%
へき地校の児童生徒数の割合	・ 小学校児童数の 13.3% ・ 中学校生徒数の 13.0%
へき地校の教員の割合	・ 小学校教職員数の 24.6% ・ 中学校教職員数の 22.4%

表2 学級規模別にみた学校数等の状況

学級数	5学級以下	6～11学級	12～18学級	19学級以上	複式学級を有する学校数
小学校数	227 (43.2%)	164 (31.2%)	76 (14.4%)	59 (11.2%)	243 (46.1%)
中学校数	114 (50.9%)	61 (27.2%)	32 (14.3%)	17 (7.6%)	31 (13.8%)

※表1, 2はいずれも鹿児島県教育委員会の資料による

鹿児島県では小学校・中学校の約40%がへき地にあり、その約70%が離島に位置している。そのため鹿児島県の公立学校教員として採用された後、概ね小学校教員で1回、中学校教員で2回の離島勤務が求められる。また、複式学級を有する学校数も小学校で46%、中学校でも13%あり、再配置以降の学校では複式授業を担当する可能性も高い。鹿児島県の教員として採用された場合はへき地小規模校に勤務するのは必然のことで、へき地小規模校のメリットを活かしながらへき地小規模校だからこそできる教育活動や方法を実践できる力が求められる。

しかし、離島へき地は生活環境が便利でない、恵まれないというイメージでとらえられがちで、へき地小規模校の教育はマイナスのイメージで語られることが多い。離島を含むへき地小規模校の実情や授業、地域の様子を知らないことが赴任への不安につながっている場合が多い。

同様に、本学学生の中には、県出身者であっても、これまで離島に行った経験がなく、将来の離島赴任に不安を抱く学生がいる。そうした学生たちが、在学中に離島へき地の教育実情を垣間見ることによってへき地小規模校への認識の転換を図り実践的な問題意識を持ち続けながら教職の道を志していくのは重要であると考えられる。

3. 学校環境観察実習の実際

3.1. 学校環境観察実習の概要

平成26年度学校環境観察実習の全体的な流れは、担当事務職員が中心となって企画立案し次のような流れで進んでいった。

○ 7月3日 企画運営協議会（奄美市）

大学側と実習受け入れ機関（奄美少年自然の家、奄美市立3校、瀬戸内町立3校）の代表が集まり、計画の共通理解、それぞれの機関での詳細な打合せなどを行った。

○ 8月1日 第1回オリエンテーション

引率教員と担当事務職員の紹介、実習の趣旨と概要及び日程等の説明。個人のめあてを作成し、グループ分け確認・役割分担をした。

○ 8月25日 第2回オリエンテーション

実習に持参する物、出発日の集合及び日程に関する確認。自然の家での生活等の説明を行った。

○ 9月1日～6日 奄美での観察実習

奄美少年自然の家に宿泊し、奄美市及び瀬戸内町の小規模校6校に分散訪問し、奄美大島の小規模校における学校教育等について、課題意識を持ちながら体験的に学んだ。26年度の参加学生は36人。（そのうち初めての離島経験者22人）

○ 9月30日 学校環境観察実習報告会

受け入れ関係機関の方の参加も得て、グループごとに1週間の学びの成果を報告した。

○ 12月10日（水）学校環境観察実習研究協議会（奄美市）

大学側と実習受け入れ機関の代表が集まり、平成26年度経過報告及び事業に対する意見、要望等を協議した。また27年度の事業についての意見交換も行った。

3.2. 奄美での学校環境観察実習の実際

奄美での体験学習は次のような日程と内容で進められた。

9/1	月	鹿児島新港 発 (18 時) [船中泊]
9/2	火	名瀬港到着 (5 時) 龍郷町秋名集落 アラセツ行事「ショチョガマ」参加観覧 少年自然の家入所 (8 時) 午後：自然の家の研修メニュー [自然の家泊]
9/3	水	奄美市の 3 つの小規模校 (知根小、手花部小、大川小中学校) における体験学習 [自然の家泊]
9/4	木	瀬戸内町の 3 つの小規模校 (嘉鉄小、阿木名小中学校、諸鈍小中学校) における体験学習 [自然の家泊]
9/5	金	自然の家の研修メニュー [船中泊]
9/6	土	鹿児島新港 着 (8 時 30 分)

特に、9 月 3、4 日の学校体験の日程については、各受け入れ校で学生たちに普段の学校の様子を体験させながらも行事との兼ね合い (運動会が近い時期) を考慮して、特色ある実施計画を立てていただいた。学校の特色ある教育活動の特設、地域の方々との連携のもと奄美ならではの特色ある教育活動の設定など、学生たちに幅広い学びの場を提供してもらった。

実習の様子を日を追って簡単に記しておく。

◇ 9 月 1 日 (月)

午後 4 時鹿児島新港に集合。(学生 36 名：男子学生 15 人女子学生 21 人、引率教員 3 名)
18 時発。離島が初めての学生には 11 時間も船に乗る体験は驚きだったと思う。こうした交通手段で行き来をする場所に暮らしや学びの場があることに気付くことも大事である。幸い波が穏やかで快適な船旅になった。(船中泊)

◇ 9 月 2 日 (火)

5 時過ぎ名瀬新港に着く。下船後、バスで龍郷町秋名集落へ向かう。国の重要無形民族文化財に指定されている秋名アラセツ行事「ショチョガマ」を見学。この行事はショチョガマ (藁葺き小屋) の上に男衆が乗り、日の出とともに小屋を揺り倒し豊作を祈願するものである。地元の方々と一緒に参加する男子学生もいた。今回は、偶然にもこの行事と重なったので日程に組んでもらい参観が可能になった。地域の祭りに入り込み、日常生活で息づいている奄美の文化に触れる良い機会となった。

8 時奄美少年自然の家に到着。朝食。

10 時入所式・オリエンテーション。

昼食後、講話。奄美少年自然の家の所員お二人に講話をいただく。前半は「奄美少年自然の家について」というテーマで、T 研修主事から自然の家の事業や社会教育施設の役割などについてお話いただいた。後半は、鹿児島大学卒業の H 研修主事から、後進を育てようとする心温まる先輩講話をいただいた。学生たちには社会教育や教育機関で様々な仕事に携わる教員の存在を知る貴重な時間だった。

15 時過ぎから野外炊さん。グループで分担協力しながら晩ご飯作りをした。食後の厳しい後始末点検も学生にはよい学びであった。

20 時からミーティング。各グループごとに観察実習のテーマについて話し合い。報告会を意識した学校観察ができるよう熱心な打ち合わせが行われていた。(自然の家泊)

◇ 9 月 3 日 (水) 【奄美市立 3 校への実習】

6 時に起床し、朝食 (弁当)。知根小、手花部小、大川小・中の 3 校に分かれてバス 3 台で移動した。各実習校では、児童・生徒・先生方との対面式に臨み、校長先生の講話や施設見学などの後、配属された学級等で授業を参観した。少人数学級や複式学級での指導の様子を間近に見ることで、離島小規模校の授業を参観することができた。また、各実習校では、活動内容に、地元の方々と交流する取組みや郷土の伝統的な音楽・踊りを取り入れた活動を組み入れて、学生たちに奄美の歴史や風土、文化に触れさせる企画を組み込んでいただいた。地域との連携を強く意識させる内容となっていた。

給食の時間は、子どもたちと一緒に準備をして、楽しい雰囲気の中で食事をいただいた。昼休みや交流会では、ドッジボールやサッカー、砂遊びなど学年を越えて子どもたちと触れ合い、交流を深めることができた。先生方から「日ごろは人数が少ないのでなかなか外で遊ばない子どもたちが、今日は学生の皆さんのおかげで外で遊んでいた」との声をいただいた。

清掃指導では、どの学生も子どもたちへ声かけをしながら一緒に体を動かす姿が見られた。放課後は先生方との懇談の時間を設定してもらい、離島での教員生活の現状や悩み、へき地小規模校の長所や課題について、学生たちのもつ疑問等に対して詳しい説明や助言をいただくことができた。

夜のミーティングでは、T 研修主事の講話の後、報告会グループに分かれて打合せを行った。一日の観察実習で学んだことをお互いにシェアリングし、テーマを絞り込んだりより明確な文言にしたりして、翌日の各自の観察視点を明確にしていた。

(自然の家泊)

◇ 9 月 4 日 (木) 【瀬戸内町立 3 校への実習】

5 時 30 分に起床。6 時 15 分バス 2 台 (中型 1 台、小型 1 台) で少年自然の家発。車中で朝食 (弁当) をとった。7 時 20 分阿木名小・中着。1 グループを

降ろして、ほか2グループは古仁屋へ向かった。7時45分古仁屋港着。休憩後、加計呂麻島の諸鈍小・中グループは水上タクシーで、嘉鉄小グループは引き続きバスで実習校へ向かった。水上タクシーグループは、大島海峡航行中にわか雨に見舞われた。

各実習校では前日と同様、児童・生徒・先生方との対面式、校長先生からの講話や施設見学などの後、各自配属された学級等で授業を参観した。子どもの数が年々減少するなかで、先生方がどのような工夫をしながら少人数・複式学級での授業や学級経営に取り組んでいるのかを観察することができた。また、参観した授業や交流会では、島唄・三線・八月踊りなど奄美の郷土芸能に触れる機会を作ってもらい、この日も奄美の歴史と文化を生かした教育実践を学ぶ有意義な時間となった。

一方、受け入れ校の子どもたちにとっても、大学生たちと話したり一緒に活動したりできたことは貴重な刺激となり、大学を身近に感じるよい機会になったようだ。

◇ 9月5日(金)【自然の家の研修メニュー】

7時から全員で朝のつどい。ラジオ体操(大島バージョン)や簡単なレクリエーションをして、2日間の学校観察実習の緊張で疲れた体を目覚めさせた。施設や各部屋を分担して掃除し、各自荷物の片付けまでしたあと朝食をとった。

潮汐の関係で午前クラフト活動、午後海浜活動という研修メニューになった。クラフト活動では、貝のプレスレット&ペンダント制作、サンゴクラフト、フォトフレーム作り、紬クラフトなどに挑戦した。奄美の自然や工芸品を活用したクラフト活動は、地域素材を活かした教育活動を創造するヒントとなり得たのではないだろうか。

昼食後、カッター訓練と熱帯魚ウォッチングを行った。学生たちは奄美の強い日差しの下、青く澄んだ海での活動を満喫した。活動後、自然の家に帰り、シャワーを済ませ、17時30分から自然の家での最後の夕食をいただいた。

18:45から退所式。21時30分フェリー乗船。(船中泊)

◇ 9月6日(土)

8時30分鹿児島新港入港。全員無事帰着。
乗船ターミナルで簡単な解散式。

4. 学生たちの意識変化

参加した36人のアンケート結果をもとに、本学校環境観察実習の教育効果を考えてみたい。

4.1 事前の実習のめあて

8月1日に行った第1回オリエンテーションにおいては、本実習に対する各自のめあてを決めさせた。1年次に履修した教職基礎研究(鹿児島市内の公立小中学校における3日間の学校体験)を

想起させながら、同じ県内の離島域にある小規模校への実習に対するめあてを明確にさせた。(自由記述) 各自の記述から、キーワードを拾い上げ一覧にしたのが次の表である。

No	事前のめあて
1	複式学級の様子：異年齢児童同士の関わり、授業の進め方、奄美ならではの教育活動
2	離島の教師の仕事、児童生徒同士の関わり、地域のひとと児童や教師の関わり方(ひとひととの関わりを重点に)
3	離島の教育の特徴 小中併設校の影響 少人数での児童と教師との関係性 離島の教育の全体像の把握
4	少人数指導の配慮事項 子どもたちとの積極的な関わり
5	教師の授業の工夫 生徒同士の関わり 中学生の役割
6	複式学級の授業の進め方、島の風土に触れる、離島の学校の様子や教師の接し方
7	教師と子どもの距離、離島の子どもたちの成長
8	授業の工夫 学級経営 地域と協力した教育活動
9	少人数での授業の様子、運営(経営) 子どもたちのふれ合い
10	小規模校での授業の進め方 教師と児童生徒との関わり 奄美の学校の独自性
11	子どもたちとの積極的な関わり 島独自の教育(島ならではの教材)
12	先生方の工夫、意識していること
13	複式教育の方法 異学年の関わり方
14	特色ある教育活動 地域との連携 教師の工夫
15	小中併設校の具体的な取組 地域の方々との連携
16	離島を生かした指導方法 奄美の自然を生かした教育
17	複式教育の方法 異学年の関わり方 地域のひととの関わり
18	離島に住む子どもたちの生活の様子 複式学級での教師の工夫
19	複式学級における教師の工夫 学級経営の苦労 少人数教育の実態とデメリット
20	複式授業のやり方 児童の授業への参加の様子 島特有の自然環境を生かした教育 児童の学習の仕方・学校生活
21	特色ある教育活動 小中学校の連携
22	生徒と教師の距離感と関わり 地域と連携
23	大規模校と小規模校の違い 特色ある教育活動と環境づくり
24	小中併設校の具体的な指導
25	自然を生かした授業と教師の配慮
26	教師の仕事の内容と工夫 児童生徒への接し方 学級経営 学校と地域の連携 授業の工夫 保護者との関わり方 登下校
27	小規模校ならではの工夫 複式学級のよさ取組、効果 豊かな自然環境の中での教育活動
28	小規模校の特色 学級経営の工夫 地域の人々との関わり方や連携
29	離島の学校の特色 子どもたちと自然の関わり 複式学級での教師の対応 地域の人との関わり
30	離島の学校での教師の仕事 児童生徒との関わり
31	小規模校の教育活動 教師と子どもの関係 地域との関わり方や連携 小規模校での教育活動のメリット、デメリット
32	離島の小規模校における児童生徒の関わり 小規模校ならではの教育活動 離島という環境が児童生徒にもたらす影響
33	離島の学校の特色 授業、休み時間 生徒と教師の関わり方
34	離島の学校の特色(児童生徒の実態 離島の学校ならではの良さや特徴、複式授業など) 教師の存在や活動内容 いじめや不登校児への対応 子どもの島に対する気持ち 離島の生活環境や伝統・文化・島の住民の暮らし 離島における学校の意義や役割
35	複式授業での教師の関わり方、工夫 児童との積極的な関わり 異学年児童の関わり 児童と教師の関わり 学校と地域との連携した取組 学級経営、学級経営の特色 児童の学習状況の把握
36	小規模校の児童生徒の関わり 教師の関わり方 複式学級における学級経営や授業構成 児童生徒の学習上生活上の困難に対する学校や教師の配慮や支援

「小規模校」「複式学級」「少人数指導」「小中併設校」「離島の教育の特徴」「離島の教師の仕事」「離島の子どもたちの成長」「島独自の教育」などの言葉が多い。離島へき地小規模校に行くに当たって、これから出会う教育環境や教育活動に対する期待と不安が感じられた。

4.2 参加観察実習中のミーティング

事前のめあてを立てた学生たちは、学校体験を終えた二晩、自然の家の研修室に集まり、グループで協議を重ねた。9月の報告会に向けたグループの発表内容を絞り込んでいく話し合いである。各自がその日観察してきたことを語りながら感じたことを出し合い交流しあった。グループ内で別々の学校に観察実習に行っているのにもかかわらず、話し合いの中で焦点化されていく「離島へき地小規模校の特性に関する認識」を共有化したり多面的な視点から意見を述べ合ったりする姿が見られた。自分の感動や意識の変化をグループでシェアリングすることで、更なる意欲向上につながり、どのグループも時間の経過を忘れるほど熱い語らいが続いた。

4.3 報告会の開催

9月30日、教育学部において、実習参加学生（全6グループ、発表時間各グループ10分）の報告会を開催した。実習に対するめあてと体験をとおして学んだことや実習前後の心境の変化、今後の課題等について、グループごとに1週間の学びの成果を発表した。グループごとのテーマは次のようなものであった。

NO	テーマ
1	小規模校における教師のかかわり方 ～教師と児童・生徒、教師と地域～
2	学校環境観察実習を終えて ～教職に対する思いの変化～
3	学校環境観察実習 ～奄美大島における体験学習～
4	奄美大島における教育と本土の教育との違い
5	俺の奄美～小規模校の授業、伝統文化の教育～
6	奄美文化と教育の結びつき

グループ毎に事前の話し合いや練習がしっかりとされており、限られた時間内で中身の濃い報告が行われた。あるグループのまとめを紹介する。「私たちの中に『離島だから……』という先入観があった。実際に教育現場に足を運ぶと本土と遜色ない、むしろ質の高い教育が行われていた。教育の土台はどこにあっても変わらない。それに、地域、学校の特色、環境がプラスされて、一つの教育現場が形成されていく。つまり、離島だからといって、教育にハンディはない。それを理解した上で、教師を志したい。」

5泊6日の奄美での生活、実質たった2日の学校体験であったが、感受性豊かな彼らの心が大きく揺り動かされたからこそ充実した内容の報告会となり好評を得ることができた。

4.4 事後のアンケート

本実習の事前・事後の学生の意識変化を尋ねた結果、次のような回答が得られた。

質問1：この実習に参加する前と後では意識の変化がありましたか？ (人)			
かなり変化 した	まあ変化し た	あまり変化 していない	変化しな かった
24	11	0	0

質問2：どのような意識の変化がありましたか？ (自由記述)
・離島赴任に対する不安が解消された。 ・複式の教え方もいろいろ楽しそう。 ・小規模校での授業構成等「教育」という分野の深さを実感した。 ・教師になりたいという意識が強まった。 ・奄美大島にまた行きたいと思った。 ・離島で教員として暮らしたい。 ・離島に対してのイメージや見方が大きく変わった。 ・自分の役に立った。 ・伝統と文化を守りつないでいくという重要性を感じた。 ・学校と地域のつながりが想像していた以上に強く温かい環境だと感じた。 ・島の中学生はしっかりしている。 ・明るく素直な子どもが多くて驚いた。

質問3：その他（気づいたことや要望等）（自由記述）
・子どもたちと関わる場面が多く、遊びの中で気づくことや授業の仕方では学べきところがたくさんあった。 ・自分の経験を友達や先輩に伝えたい。 ・この実習を続けていってほしい。 ・すばらしい実習だと思うので、より多くの学生に参加してほしい。 ・お世話になった奄美の方々や先生方へ感謝の気持ちでいっぱいである。

4.5 事後レポートにみる個の意識変容

最終レポートの文面から、学生たちの変容が記録された箇所を抜き出してみた。

No	事後の感想
1	小規模校におけるメリット、デメリットとその解決策について考えた。
2	小規模校の教育の素晴らしさに気づいた。小規模校ならではの教師と児童生徒、教師と地域の連携、かわり方を学び、離島だけでなく自分が教師になったときに役立てたい。離島での教育について多くの学びがあり、鹿児島で教師をしたい、離島での教育に携わりたいという気持ちが高まった。
3	実習が始まる前、何をしたいか、どんなことを学びたいか、そのような具体的な考え方は固まっていなかった。時間が経つにつれ、離島の教育のよさ、そして難しさを目の当たりにすることとなった。教育だけでなく伝統や文化に触れることで見えてきたものも多い。一層離島での教育に興味をもつことができた。
4	自分の教師になりたいという思いは、さらに強いものになった。加えて、少人数での指導や複式授業についてさらに関心が深まった。教員になったら、ぜひ、離島に赴任したいと思った。
5	この実習に参加しなければ離島教育に対してプラスのイメージを持つことなく教師になっていたろう。奄美の人々・長い歴史を持つ文化と直接触れ合うことができ、心身ともにこれまでとは違う自分になったと感じる。改めて教職に対する魅力を感じた。
6	素晴らしい文化や雄大な自然、人々の温かさに触れ、離島赴任への不安はなくなり、むしろ行ってみたいと思うようになった。確かに不便な点もあるが、それに負けないよさがあることに気付いた。離島赴任をするときには不安でなく期待を胸に訪れることができそう。
7	学校は多くの人に支えられていることが分かった。のびのびと育つ環境が元氣いっぱいの子どもたちを形成している。より、教師という夢が明確になり、このような子どもたちを育てることに携わりたいと考えられるようになった。
8	「学ぶ」という姿勢を常に忘れずに、向上心を持ちながら仕事に、遊びに、すべてのことに全力で打ち込んでいきたい。
9	この経験ができたことで、小規模校の学校に行く際に自分の中で少しは余裕を持つことができるのではないかなと思う。この実習で学んだことを将来に生かしていきたい。
10	離島に対するイメージが変わった。離島に対して前向きにとらえるようになった。離島赴任に対する不安は、自分がそうであったように実際に離島に足を運んでみると解消される思う。
11	貴重な経験、出会い、学びなどたくさんのものを得られた。「熱い思い」を持った教師になろうと思った実習であった。
12	さまざまなものを目にしたことで教師に対する視野が広がったと感じる。離島に対する先入観や赴任への不安は解消されたと思う。教育に関してのハンディはそれほどないと学べた。
13	教育に対する熱い思いをもった先生や温かい心をもった子どもたちがから島の教育の素晴らしさを教わった。この教育を島だけでなく、どこでも実践できる教師を目指したい。改めて鹿児島で教師になる決意が固まった。
14	離島の教育を自分の肌で感じることで、愛着を持った離島教育の理解が少し明確なものとなった。置かれる環境で子どもたちは変化する。環境で変る。この言葉は自分自身の大きな転換となった。理想の教師像を4年間で創り上げたい。
15	学校は地域あつてものである。子どもにとっては教師だけが先生なのではなく地域の人々そして自然も先生なのだと考えた。
16	離島の教育も本土の教育も本質的な違いはない。このことが分かっただけでも今回の実習は有意義だったと思える。地理的不利はあっても教育的不利はない。教師はどの場所であってもその地域の特性を生かした教育をしていかなければならないと思った。
17	私は離島に対する偏見を抱いていたということを反省した。離島でも鹿児島本土の児童と同じ教育を受けているということを学ぶことができた。
19	離島の学校や小規模校に縁がなくイメージすらわかない状態だった。実習に参加して未知だった奄美に対してのイメージが変わり、自分の目で観て考えることで得られるものがたくさんあることが分かった。これからの大学生活につなげていきたい。
20	離島での教育に携わっていききたいという意識は高まったものの、小規模校の学校経営、複式学級による授業構成のやり方などについてこれから学ぶべきことはたくさんあると気付いた。

21	実際に奄美行ったことで様々な不安が解消された。自分の目で見て直に話を聞いてみるのは、文献を読んだりインターネットで調べたりするのは違う。自分の視野を広げることができた。
22	離島教育に対する考えは大きく変わった。教師の仕事の奥深さや楽しさを知り、もう一度自分の将来について考える良い機会になった。
23	離島での学校教育の実態や、豊かな自然と奄美特有の文化を肌で感じることで、多くのことを吸収できた。人々の温かさが特に印象に残っていて、人と関わることの楽しさについて改めて感じることができた。
24	今回訪れた学校では不利といわれる環境も逆に有利なものとして捉え、離島ならではの利点が多くあるように感じられた。不安に思っていた離島赴任であったが離島に赴任したいという思いが強くなった。
25	子どもたちだけでなく奄美の人みんなが素直で、元気、そして温かいかった。小規模校や複式学級ではメリットを生かした授業を行うことが大事だと感じた。
26	「小規模校での教育」と「地域と教育の関係性」の2点に注目して取り組んだ。共通していたのはつながりが重要であるということ。この経験を生かして今後の学習に取組み、いつか教師として奄美に來たいと思う。
27	自分は「複式学級」という言葉とはほど遠い環境で育ってきた。小規模校にはメリット、デメリットがある。ここでしか経験できないことも数多くある。
28	離島ということに不安に思うことは何もない。少人数ならではの他学年交流や奄美の特色ある文化が子どもたちの教育にどのように結びついているかについてこれから追求していきたい。今後の勉強をさらに質の良いものにしていきたい。
29	離島に赴任する時の不安が消え、人の温かさのある奄美で教師をやりたいという思いがとて強くくなった。学んだことをこれからの大学生活に生かしていきたい。
30	小規模校における課題点について少なからず知ることができた反面、良い点にもたくさん気付くことができ、離島に赴任することへの不安は少なくなったように思う。
31	小規模校の教師の目線から観察して、離島ならではの素晴らしい教育をみることができた。小規模校ならではの大変さや良さ、楽しさなどを感じることができた。自分の母校のような小規模校で教師になりたいと改めて強く思うようになった。
32	奄美大島の教育の実態を実際に目で見て肌で感じることで、自分がいかに現実とは違う先入観を持っていたかということを実感した。教育の本質の部分はどの学校であつても同じであると強く感じる事ができた。
33	離島の学校に抱いていたイメージが全く違うものになり、将来離島で教師としても働きたいと思うことができた。
34	目の前にないものを嘆くのではなく、あるものを最大限に生かしていくことで、義務教育にプラスして奄美大島らしさを重視した教育を行っていた。自分の想像を遥かに超える充実した時間となった。教師なりたいたいという気持ちもより強いものとなった。
35	鹿児島県の離島の学校の魅力を感じることができた。地域的不利はあつても教育的不利はあつてはならない。すべての子どもたちが満足いく教育を受けるべきだと強く思った。
36	人と人の結びつきが強い印象を受けた。授業では、総合的な学習の時間を利用して奄美の自然や文化、伝統芸能などを学習する機会を設けていた。教師自身がその地域に詳しくならないといけないと思った。地域の人のつながりを作ることも大切で、教師はその中継の役になるのではないだろうか。

離島であること、へき地校であること、小規模校であることはマイナスイメージでとらえられがちである。あくまでも感覚的なことだと分かっている、参加学生たちもそうしたイメージにとらわれていたことが分かる。

1960年代北海道教育大学僻地教育研究施設は、次の6点をへき地の特性として規定した。

- ア 自然的悪条件 イ 僻遠性
ウ 文化的停滞性 エ 教育的低調性
オ 社会的封鎖性 カ 経済的貧困性

へき地の特徴として、どれもマイナス特性を示すものである。しかし、玉井はこれら6つのへき

地の特性もその位置づけを変えれば、積極面を伸ばす教育として位置づけできるといっている。(玉井 2013)

この学校環境観察実習は選択科目であり、受け入れの関係から毎年 40 人前後の学生しか参加できない状況がある。しかし、ほとんどの学生が、実際に離島へき地小規模校を訪れ、そこで学ぶ子どもたちや教員の姿、教育の現状を自分の目で確かめ触れ合ったことで、離島赴任に対する不安を軽減している。と同時に、学生同士が同じような課題をかかえて実習に臨み、寝食を共にしながら語らいや学び合いをとおして、離島へき地小規模校に対するイメージをマイナスからプラスに転換させている。将来教員を目指す学生たちだからこそ、離島も含めたへき地小規模校の地域性や小規模性の特性をプラスの面として認識し、それを生かす教育の方向性を紡ぎ出そうとする力を養っていく必要があり、そこに本実習の意義があると考ええる。

実習後、受け入れ校の生徒から「大学生の姿を見て、大学に行きたくなった」という感想をもらった。普段大学生に接する機会が少ないからこそその感想である。また、学生たちが昼休みに遊びに加わったことで、日ごろ経験できない大人数でのゲームや遊びに興じる児童生徒の姿も印象的であった。本事業が、学生側だけでなく受け入れ校の子どもたちや教員にも大きな教育効果をもたらしていると感じた。

5. おわりに

急速に進む少子高齢化の波によって、これから先、日本の多くの地方で小規模校の割合が増えていくことは予想に難くない。本学部学生が奄美の学校環境観察実習で体験する小規模校は、その究極の将来像とも言えるだろう。離島を含めたへき地小規模校の実際を肌で感じ考える体験の中から、新たな教育の未来が紡ぎ出されていくのではないかと考える。今後もこうした意義あるプログラムが継続していくことを願っている。

参考文献

玉井康之，二宮信一，川前あゆみ（2013）～教育

活動に活かそう～へき地小規模校の理念と実践，教育新聞社，pp.18-25

川前あゆみ（2015）教員養成におけるへき地教育プログラムの研究，学事出版 pp.126-153